

# スローラーナーの英語指導

—「読めた」「わかった」を目ざして—

泉 恵美子

## 1. はじめに：英語教育改革の波

ここ数年英語教育界に大きな波が押し寄せている。「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」(2011年)に続いて、文部科学省から「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」(2013年)が出された。2020年を見据え、小学校中学年から外国語活動を始め、高学年で教科として英語を導入する。中学校では英語で授業を行うことを基本とし、高等学校では授業を英語で行うとともに、言語活動を高度化(発表、討論、交渉等)するなど、小・中・高を通じて一貫した学習到達目標を設定することにより、英語によるコミュニケーション能力を確実に養うことを目標に逐次改革が進められている。その後、有識者会議を終えて2014年9月26日には「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告(概要)～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」が出された。

また、今年度より「スーパーグローバルハイスクール(SGH)」が56校指定され、世界と戦えるグローバルリーダーを育てる新しいタイプの高校を目ざし、英語力だけでなく、幅広い教養や問題解決力も身につけた生徒の育成を促すとされている。大学入試も4技能を測定可能な外部検定試験の活用の普及・拡大を図るとされ、英語力の到達目標は高校卒業段階で英検2級～準1級、TOEFL iBT57点程度以上などかなり高いものである。一部の優秀な生徒を除き、平均的な高校生や英語が苦手な学習者はどうなるのかといった懸念を拭い去れない。

## 2. スローラーナーとその原因

英語学習者においても二極化が進んでいる。飲み込みが早く、どんどん学習が進むファストラナーと、自分のペースでゆっくり学ぶタイプのスローラーナー。後者は努力が結果に反映されるまで、人より時間がかかる。しかし、基礎からマイペースでじっくり学べば確実に揺るぎない力をつけられる学習

者である。また、皆の前で発表することや、ペアやグループ学習が苦手な学習者もいる。そのような場合は、競争的課題によって他人と比較をせず、マイペースに勉強し続ける環境を与え、励まし支援し続けることが大切である。筆者も長らく公立高校で教鞭を取っていたが、早い段階から英語や授業がわからないことで苦手意識をもち、英語学習から遠ざかり、さらにテストで点が取れずに自信を失い、英語が嫌いになると同時に、いくら頑張ってもできないと劣等感を抱いている学習者を多く見てきた。

中2生2,967名を対象にした Benesse 教育研究開発センター「第1回中学校英語に関する基本調査(生徒調査)」によると、「好きな教科」において「英語」(25.5%)は9教科中8位で、「国語」(25.0%)に次いで2番目に低い数字である。また、英語が「とても苦手」あるいは「やや苦手」を合わせると、約61.8%の生徒が英語を苦手と感じている。それでは、かなり多くの生徒がスローラーナーということになってしまうのだろうか。同調査では、苦手と感じるようになったのは中1の後半から中2の始めごろが多く、特に4技能の中でも読むことが嫌いであるようだ。

つまずきの原因としては、文法が難しい(78.6%)、テストで思うような点数が取れない(72.7%)、英文を書くのが難しい(72.0%)、聞き取るのが難しい(65.8%)、単語を覚えるのが難しい(62.9%)、話すのが難しい(59.6%)、自分から進んで勉強する習慣がない(53.7%)、外国・異文化に興味をもてない(44.8%)、音読するのが難しい(44.7%)、英語自体が嫌い(43.9%)、勉強する気持ちがわからない(43.0%)となっている。このようなつまずきへの教師の理解と認識が求められる。

## 3. 指導の留意点

スローラーナーの指導では、英語を学ぶ目的、意義とゴールを意識させることが必要であるが、その

ためには、教師のピリーフと長期計画が必要で、自らの楽しかったり辛かったりした体験を語り、自己開示することで、生徒も心を開き、自分のことを語るようになる。また、生徒の英語学習の動機はさまざまであり、英語学習への興味・関心に関するもの、受験や成績に関するもの、教員に関するものなどに分かれるが、「英語嫌い」の増加や授業の理解度が低い生徒の多さは大きな課題であり、まずは生徒の学習状況や学習意欲を理解することが必要で、その上で授業の内容を工夫することが望まれる。その際、訳や文法の説明だけでは不十分である。英語をわかる(全部わからなくてもよい)、使える、できるといった感覚・体験、友だちのことを知る活動などを通して、生徒の興味・関心、知的好奇心を引き出すことや、感動を与えたり生き方について考えさせる教材(自分で音読できるもの)を選ぶことが大切である。語彙や表現、文法などは繰り返しスパイラルに教え覚えやすくすることが重要で、語順、時制、数の概念などゆっくり復習できる時間を確保したい。日本語との違いに気づかせることや、苦手な分野があっても得意な分野を伸ばせばよいと伝えよう。

理解度が低い生徒にとって頼りになるのは友だちであろう。ペアやグループの協働学習を通して自由に尋ねたり教え合い、学び合える関係と、まちがえても大丈夫と安心できる雰囲気を作ることが大切である。また、教師と生徒、生徒同士の間関係を構築し、楽しく、笑いやインタラクションがある授業、情緒や身体が開放され、できたことを賞賛しあったり、仲間と共に喜び、生きたことを学ぶ授業を目指したい。その際、魔法のことは「大丈夫だよ。」「最近頑張ってるね!」「できたじゃない!」と笑顔を忘れないようにしたい。さらに、生徒がわからないところがあったときの支援体制を工夫し、自己評価用紙を用いて振り返りやコメントを書かせ、それにより個別指導や質問の時間を設けたり、クラスで英語学習のリーダーとして仲間の生徒の質問に答えたり、暗唱チェックなどをするミニ教師を育成したりしながら、諦めさせない粘り強い指導を行おう。少人数クラスであれば個々のつまずきの原因を考え、寄り添い対応することがしやすくなる。最近は特別支援教育からユニバーサルデザインの視点を授業に盛り込むことも推奨されており参考になる。例えば ICT や視聴覚教材を有効に活用し、わかりやすく

魅力的な授業を創造することもできる。生徒の授業の理解度と好きな教科は関係が大きく、授業を理解できるようになれば、英語を好きだと感じる生徒が増える。教師の意識改革と授業改善が必須である。

#### 4. リーディングの指導法

小学校でアルファベットの太文字・小文字の形と読み方を学び、初頭音、語末(押韻・脚韻)などの気づきから、3文字単語の読みを導入するが、boy と dog をまちがえたり、baseball が読めない生徒などが出てくる。つまり、うまく文字を音にすること(音韻符号化)ができないと、音読ができず、音で聞けばわかっても、読むと意味がわからなかったり、句や節、文のまとまり(chunk)がつかめなかったり、構文・文法がわからないということが起こる。また、テキストが読めないと内容がわからず楽しくない。

そこで、小学校段階からリテラシー指導をじっくりと丁寧に行い、音素、音韻認識と文字との結びつきを意識させることが大切である。中学校では書く指導を行うが、いきなり書かせずに音声指導を十分に行い、発音⇒音読⇒筆写⇒dictation という流れで指導したい。英語の音とリズムを体感させ、身体や五感を用いて覚えさせるとよい。その際、歌やチャンツ、ナーサリーライム、早口言葉なども役立つ。

読解力には音声言語と書き言葉を結合し、音素(phoneme)と書記素(grapheme)を対応させ、韻律情報(prosody)に基づき文全体を音声化し、イメージをもって内容を読み進めるボトムアップ処理と、自分もつ背景知識や概念能力を用いて、テキストから情報を選択して、最小限に抽出し、予測し、検証し、確認しながら読み進めるトップダウン処理の両方が必要である。また、知覚処理(視覚情報)と認知処理(書字、統語、語彙、意味)を相互に行いながら読み手がテキストと対話を行う。すなわち、単語の符号化、語彙アクセス、意味的・統語的分析、テキスト・スキーマ処理などを行い、ワーキングメモリ内でテキスト情報を引き出し解釈することなど高度な能力が要求される(門田&野呂, 2001)。

スローラーナーはスキーマや統語的、意味的冗長性を十分利用できなかつたり、音韻認識、音韻符号化が苦手であったり時間がかかることが多い。視覚的に文字を認識し、語彙と意味を理解し、解読(decoding)し、単語や句をひとまとまりとして認識

し、発語、文法処理、音韻処理を行うこと、音声を聞き、単語、音節、音素を認識したり、キーワード法等で音一文字連合記憶の形成を図るボトムアップと、文脈から単語を推測したり、視覚的語彙を形成して読みのスピードアップを図るトップダウン、抽象的な語彙理解も含めた語彙力を高める指導を行う訓練が必要である。その際、文字カードなどで表記文字と音を対応させ、よどむことなく読めるようになれば、ひとまとまりとして単語や語句を音読することができるようになる。意味理解としては、イメージの絵を描かせたり、辞書を引かせると語彙学習が進む。単語を音読し、意味を学び、例文を作成するなどしながら、英文の意味がわかればことばが好きになる。読み聞かせなども意味のネットワークに重要であり、教師が読む際に、語感や余韻を楽しんだり、作品に豊かに触れさせたりすることを試み、心を動かし、感動する読み物を与え、身体との同調を図るとよい。情動と身体と言語は密接に関係している。感情を伴い、楽しい、おもしろいと感じながら意味を中心に学ぶと学習が進む。

深い読みにつなげるためには、読みにおける推論と、物語における時間、空間、因果関係、主人公や登場人物、意図性や動機などを理解する状況モデル(Zwaan & Radvansky, 1998)の指導が有効である(泉ほか, 2010)。また、リーディングストラテジーとメタ認知の活用も推奨しよう。まず、自分で読めるように速度を調節したり、指で文字をなぞりながら読んだり、声に出して読んだり、意味が取れるように戻って読み直したり、視覚情報を参照したり、キーワードのみ拾ったり、概要把握読み(skim)や検索読み(scan)をしたりすることなどを指導する。辞書を使ったり、リストを参照したり、テキストに印を入れたり、メモをとったり要約をするなどの読むプロセスも指導する。次に、自分の読解をモニターできるように、話題・タイトル・見出しなどから仮説を立て、予測しながら読んだり、内容・話題や文化的知識、談話標識などテキスト形式などの情報源を活用したりして、頭の中で情景を描かせ、個人的体験と照合させて読ませる。生徒が興味をもてる内容や、個人の体験と重なるものであれば、自分ならどうするかとテキストと対話しながら読み進めさせ、最後に、質問に答えさせたり、疑問や感想を述べさせるとよい。

読解力を上げる指導方法としては以下のことが有効である。

音声から入る(聞きながら読む)/段階的な文字指導(BU と TD)/音韻認識/チャンク読み/語彙の指導(意味的ネットワークの構築)/さまざまな音読指導/読み聞かせから多読(やさしい読み物)/スキーマの活性化/推論や状況モデルの構築/リーディングスキルとストラテジーの指導/動機づけを高める工夫/自律した読み手へ育てること

スローラーナーの場合は、その過程を一つ一つ丁寧に指導し、読める、わかるといった体験をさせることが重要である。

## 5. 指導の具体例

リーディング指導では、3つの段階が考えられる。

(1) Pre-reading: テーマに関する質問などを通して動機づけを高め、スキーマを活性化するとともに、必要な語彙を導入しておく。

(2) While-reading: 内容やジャンルに応じて、じっくり読んで内容を考えさせたり、聞きながら読んだり、チャンク読みをさせたり、線を入れさせたりする。また、ペアでサイトトランスレーションをしたり、リーディングストラテジーを使わせたり、内容把握の問題に答えさせたりする(T or F, 多肢選択, Q&A など)。さらに、教師は簡単な英語で paraphrase をしたり、事実発問、推論発問、評価発問、個人に関わる質問や問いかけなどさまざまな発問を工夫する。

(3) Post-reading: 要約やリテリング、ロールプレイ、調べて発表、感想を書かせるなどをさせる。読んだことについて話したり書いたりと技能を統合させ、最終的にアウトプットをさせるためにインプットやインテイクをさせることが大切である。

ここで、数研出版の *COMET English Communication I* のテキストの中からリーディング題材を取り上げてみたい。Reading 1 *Let's Try Riddles!* では、英語の音やつづり、修辭的なひっかけを含むものなど英語のなぞなぞに挑戦させ、読んでその内容を理解することで英語の多面的な理解を深め、答えを考える楽しさを味わえるようになっている。

Q3. What pet is always on the floor? や Q5. Five wild birds were on a tree, and a hunter shot one. How many birds remain? とした語

藁や光景を思い浮かべさせるものや、Q6. One fine summer day, two fathers and two sons went fishing at a lake. They fished and talked all morning long, and everyone caught one fish. When the two fathers and two sons walked back home, everyone was happy. Each had a fish, although they caught only three fish. ... How can this happen? といった少し考えさせるものなどがあり、などを解くために何度も繰り返し読ませることができる。生徒は楽しみながら英語を読むことができ、読後は各自あるいはペアやグループで英語などなどに挑戦させると、英語の活用につながる。

Reading 2 *Hachiko* では、「忠犬ハチ公」に関する文章を読み、その内容を理解するとともに、天国のハチ公に手紙を書くというタスクを与えて物語を読んだ感想を簡単な英語で書かせることがねらいとなっている。ハチ公と主人公の出会い、ハチ公が主人のいない渋谷駅に通うようになった経緯、ハチ公が亡くなったときの主人公の気持ちなどを理解させながら読ませ、読後は本文の内容を簡潔にまとめて話させたり、感想を言わせたり、ハチ公に対する自分の気持ちを手紙の形式で書かせ、互いに静かに読みあったり、オーラルインタープリテーションを含んだ音読などをするとさらに内容理解につながる。教師の発問がカギを握る。生徒の想像力を高め、ハチ公の行動に対する解釈や共感を生徒と共有したい。これらの教材は、要点や詳細をとらえる、聞き手に伝わるように音読する、文章の構成を考えながら読む、未知語の意味を推測したり背景となる知識を活用したりしながら読む、といったことができる。リーディング力を伸ばすのにふさわしい読み物となっている。分詞構文や仮定法過去などが用いられているが、英語を解釈するというよりも内容に引き込まれて次を知りたい、そのために先を読みたいといった気持ちにさせる題材は有効である。筆者も読みながら心がゆすぶられ、スコットランドに伝わる Greyfriars Bobby の銅像を想い出したりした。

## 6. 指導と評価

先述したようにテストで点が取れないことから英語に対する苦手意識が表れ、英語嫌いになるケースが多い。そこで、テストと評価の在り方は大変重要である。筆記テストではなかなか成果が出ない生徒

も、個別に音読テストや暗唱、スピーチをさせて評価したり、ALT とのインタビューや、ロールプレイ、タスクなどのパフォーマンス評価では力を発揮することがある。授業中に用いたタスクや活動で、十分納得のいくまで練習をさせ、できるようになったことを評価する、あるいは創造性や自己表現力、努力・工夫なども評価の対象とすることが重要である。うまくいくと自信がつくため、成功体験を積ませることでやる気を育てたい。皆の前で恥をかかせることは絶対に避けよう。時間がかかるが、ひとたび生徒の心にやる気生まれ、灯がつけば諦めずに英語学習に取り組むきっかけとなる。

また、家庭学習を見直し(難易度や量の異なる課題を出すなど)、授業と連携させ、努力すれば点が取れる仕組みを作り、生徒の意見を入れたルーブリックを用いるとよい。その際、CAN-DO 形式を自己評価に用いて、自分ができるようになっていく過程を実感させたり、自己効力やできる感を感じさせたり、今自分がいる位置を把握し、次はどのようなふるまいをすれば更によくあるかを振り返る機会を与えたりするようにしたい。学習者のメタ認知を高めることで、自律した学習者が生まれるであろう。クリアが可能な目標を設定させ、学習のしかた、ストラテジーを指導し、将来の理想の自己像をもたせ、英語学習は入試やテストの為だけでない伝え寄り添い続けたい。

### 参照サイト

<http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=3186> 『第1回 中学校英語に関する基本調査報告書【教員調査・生徒調査】[2009年]』

### 参考文献

- 泉恵美子(2012)「スローラーナーのつまずきの原因を探る」『英語教育』7月号, pp. 10-13. 大修館書店。  
 泉恵美子・平井愛・横川博一・吉田晴世(2010)「英語読解指導における状況モデルを活かしたタスク活動の効果」『英語教育研究』33, 51-60。  
 門田修平・野呂忠司(編著)(2001)『英語リーディングの認知メカニズム』くろしお出版。  
 Zwaan, R. A. & G. A. Radvansky. 1998. Situation models in language comprehension and memory. *Psychological Bulletin* 123: 162-185.

### 引用

西光義弘 他(2013) *COMET English Communication I*. 数研出版

(京都教育大学教授)